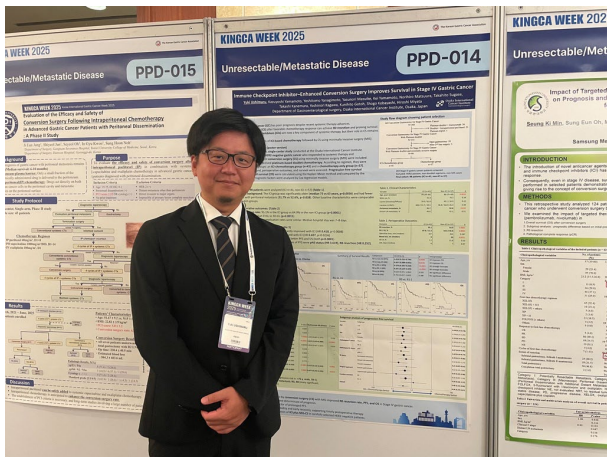


韓国胃癌学会学術集会(KINGCA Week)に参加して

大阪国際がんセンター 消化器外科 牛丸裕貴

このたび、日本胃癌学会の助成を受けて KINGCA Week 2025（開催地：Lotte Hotel Seoul, Korea、会期：2025年9月25日～27日）に参加し、ポスター発表を行う貴重な機会をいただきました。発表演題は“Immune Checkpoint Inhibitor-Enhanced Conversion Surgery Improves Survival in Stage IV Gastric Cancer”であり、免疫チェックポイント阻害薬を併用した化学療法後のコンバージョン手術が生存転帰の改善に寄与する可能性について報告いたしました。

ポスターセッションでは、韓国、インドネシア、ベトナムの先生方と意見交換を行い、各国における臨床実践の違いや共通する課題について理解を深めることができました。特に、Conversion surgery の適応、Staging laparoscopy の役割、Chemo-ICI による治療戦略や高額医療に対する社会的受容性など、多様な視点から議論が行われ、アジアにおける胃癌治療の現状を広い視野で捉える良い機会となりました。自身のセッションを通じては、コンバージョン手術後の化学療法について、いまだ十分なデータの集積や検討が進んでいない点が課題であることを改めて実感し、今後の研究テーマとして掘り下げるべき重要性を再認識いたしました。



また、上司である山本和義先生のご紹介により、ASAN Medical Center、Seoul National Cancer Center、Yonsei University の先生方にご挨拶する機会をいただきました。短い時間ではありましたが、国際的な学術交流の場に身を置くことで、今後の共同研究やネットワーク形成の可能性を感じることができました。さらに、以前よりご指導をいただいている Seoul National Cancer Center の Prof. Young Woo Kim にもご挨拶することができ、久しぶりの再会を通じて感謝の気持ちをお伝えすることができました。



会期中はポスターのみならず、複数の Oral presentation も聴講し、各国の最新の臨床研究や外科的治療の展開について学ぶことができました。韓国では医療の集約化が進んでおり、大規模施設を中心に症例集積が非常に早く、後ろ向き研究であっても多症例による詳細な解析が可能となっていることが印象的でした。こうした研究環境を背景に、多くの新しい試みや臨床的検討が次々と発表されており、アカデミックワークとしての推進力と柔軟性に強い刺激を受けました。日本とは異なる医療体制の中で実現されているスピード感や研究規模には、純粋に魅力や羨ましさを感じるとともに、自らの研究姿勢を見つめ直す良い契機となりました。

Closing Session では、ASAN Medical Center 腫瘍内科の Ryu Min-Hee 教授による “Perioperative Treatment in Localized Gastric Cancer” の講演を聴講し、世界的に進展する化学療法および集学的治療の動向を学ぶことができました。各国の臨床試験や治療方針が紹介され、グローバルな視点で胃癌治療を捉える重要性を改めて実感いたしました。こうした知見は、今後の臨床研究や国際学会発表を進める上で大いに参考になると感じました。

今回の KINGCA Week 2025 への参加は、国や立場を超えた研究者同士の交流の意義を再確認し、自身の研究テーマを国際的な文脈の中で見つめ直す貴重な経験となりました。本助成を受けて得られた学びと刺激を今後の臨床・研究活動に活かし、より良い胃癌治療の発展に貢献していきたいと考えております。

